

第四章 侵攻

1

ラムシユタイン王国都ソルバークス。

翡翠の王都とも言われ、ランゴート大陸西方における有数の豊かさを誇る都でもある。その歴史はさほど古くはないものの、この時代における西域文化の中心地のひとつとして数えられていた。

この繁栄の礎は先々代の王がラムシユタインの南方にあつた数多の小国家を併呑し、砂漠が多い実り少ない南方の土地から未開の森林であつた南西へと人を移り住まわせ、開墾を奨励したことにあつた。広大な森林は肥沃な土地である証拠であり、その土地へ効率よく労働力を移管し、開墾することによってラムシユタインは豊かな穀物地帯を手に入れた。

それはまさに「賢人王」と呼ばれたマーティス・ロイス・ラムシユタイン三世の面目躍如とも言える政策だつた。

この穀物地帯はラムシユタインから飢餓を駆逐し、国内に行き渡つた後の余剰穀物は国外へ輸出された。穀物の輸出によつて流入した外貨はラムシユタインの経済を安定させ、豊かになつた国は外貨と共に流入した異国文化をも取り込み独自の文化を築いた。

ラムシユタインは東域と西域を結ぶ陸地交易路の中継地点でもあり、西域に属しながらも東域の文化に対して抵抗がなかつたことも幸いした。西域の流麗な意匠と東域の重厚な建造物が交わり、更なる洗練を重ねた末に生まれた文化は、壮麗な王宮をラムシユタインの王都に出現させた。

それがラムシユタイン王宮、通称「碧玉宮」と呼ばれる建造物が見せる威容の正体だつた。重厚な正門の前に一台の馬車が止まる。馬車には御者と壮年の男がひとり。馬車の側につくのはラダロス銀剣騎士団の紋章を胸にした威丈夫がひとり。

馬車の中にいた男が扉を開いて外へと足を踏み出すのと同時にラダロス銀剣騎士団の総長、ゴルディア・ラキサリスが馬を下りた。馬車から降りた男は王宮の威容を見上げた。その瞳には何の感情も浮かんでいないように見える。

さすがは「北の氷壁」と言われるだけのことはある……。ゴルディアはそう思い、正門を開くべく歩み寄る。

正門に常駐する番人は人の三倍はあるうかと思われる門の上部にいる。

もちろん、客人とゴルディアが正門前に到着していることは見えてはいるのだろうが、それでもゴルディアの声と正式な通行許可書を提示しない限り門は開かない。それも当然と言えるだろう。正門から向こうは間違いなく王が住まう居住区なのだから。

王宮へとこの危険極まりない客人を招き入れざるを得ない状況に、ゴルディアは舌打ちする。この十年来、西域において最も危険な人物として広く知れ渡る男、ジョシユア・グリーリッジ。

北において他国への侵略を絶えず繰り返し、一代にして小国をラムシユタインの三倍に相当する国家を築き上げた「ジェスターメント帝国」。その皇帝、デウスヴァルトの影となり、知謀の限りを尽くしてジェスターメントを帝国へと押し上げた立役者。それがこの男の正体だつた。

西域の北をほぼ喰らい尽くした帝国が、次に狙うのは肥沃な穀物地帯を持つこのラムシユタインだという噂がまことしやかに流れて久しい。それが単なる噂かどうかについて論じられることはほとんどないと言つていい。ジェスターメントとラムシユタインの国境付近で度々おこっている紛争が事実であることを裏付けている。

この危険極まりない男がラムシユタイン王国の王宮を目の前に立っている。この状況が決して好ましいものではないことは誰の目にも明らかだつた。ジョシユアの目にはこの巨大な正門

をどう攻め落とすかが映っていて然るべき状況だった。にもかかわらず：ジョシユアの瞳は真つすく正面の門に向けられたまま、その中にはどのような感情のゆらめきも見て取れない。

これでは、案内を買って出た意味がまるでないな…。

ゴルディアは苦笑しながら、ジョシユアを見る。正門の両側にそびえ立つ見張り台を兼ねた門柱から門番の遣いがゴルディアに走り寄る。一瞬ジョシユアの姿を視界に捉え、足が止まりそうになったものの、遣いはジョシユアへは視線をやらずにゴルディアの前に辿り着いた。普段と変わらぬ見事な敬礼を見て、ゴルディアは正式な敬礼を返した。

その瞬間のことだった。門が開くその時までずっと正面を見据えたままだと思えたジョシユアの視線が敬礼を返す、ゴルディアの視線と重なった。ジョシユアの口元にはあるかなしかの笑みが浮かんでいた。

なんだ？

ゴルディアの脳裏に疑問がかすめる。

あの笑みの意味するものは…？

ゴルディアはそう考え始めている自分に気付き、我に返った。次の瞬間にはジョシユアの視線は再び正門へと向けられていた。まるで何事もなかったかのように。

そうかよ…。

ゴルディアの口元に笑みが浮かぶ。生粋の武人が浮かべる太い笑みだった。ゴルディアは持ち前の直感と経験からジョシユアの浮かべた微笑の意味を正しく読み取っていた。

ジョシユアの笑みは幻惑だった。意外な反応しか示さずに通してみせた上で、一瞬だけ何かをほのめかす笑みを浮かべる。そうすることによって敵に迷いを生じさせる。疑念を抱かせ、ほんのわずかだけでも思案させ、判断させるタイミングを与える。そのわずかな隙を突く。

ゴルディアは武人だった。しかも幾度も死線を越えてきた経験を持つ歴戦の武将だった。謀りごととは苦手としても、こういった駆け引きは敵を目の前にした戦いと同じだった。例えば意味があるうとなかるうと関係なく、迷わずに敵を討つ。それこそが武人の本質だった。

面白い。

太い笑みを浮かべたまま門番の遣いが差し向ける怪訝な視線を受けて正門を開くための許可書を差し出す。遣いの者はその許可証の内容を確かめた上で、若干不安そうな視線をゴルディアへと投げてから、門番へと合図を送った。門柱の上に立つ門番はその合図を確かめると、正門を開くために利用している水車のレバーを引いた。

ゆっくりと門が開いていく。ゴルディアは正門が開いていく様を見ながらこれから王宮で繰り広げられるであろう戦いに思いを馳せた。

ナギス…。

異能の瞳を持つあの男であれば、なんとかこの怪人に比肩しうるはず。

ゴルディアは自分の人選に過ちがなかったことを噛みしめていた。

ナギス・フォン・ブリッツハウゼンは密かに溜息をついた。なぜこんなことになったのか。

あの男が客人を襲撃さえしなければナギスはこんな場所に立っている必要性などなかったのだ。いや、例えばこの襲撃が仕組まれていたものだとしても、事前に察知できていたはずの襲撃を未然に防ぐことができれば、少なくとも自分がこの場に引きずり出されることはなかった筈だ。いや、そもそもその発端は叔父が病に倒れてしまったことから発しているのだ。叔父さえ病に倒れることさえなければ…。ナギスの思考は止めどなく流れていく。

「ナギス殿…」

自分の名を呼ばれてナギスは我に返る。ナギスの右横に座る少年。サイファ・テルト・ラムシユタインが覗き込むようにしてナギスを見ていた。

「殿下、ご心配なさらぬよう…」

取り繕うようにして微笑むナギスにサイファは苦笑を浮かべる。

「心配なのはナギス殿の方です」

「え…？」

サイファの口から出た意外な言葉にナギスは絶句する。

それほど不安が顔に出ていたか？

思わず天井を仰いだナギスに、サイファが更なる追い打ちを掛ける。

「不安に思われるのも仕方ないことだと思えますが、ナギス殿がここにおられる以上、わたしはさほど心配しておりません」

「殿下…」

王の嫡子とはいえ、わずか十三歳の王子に心配され、励まされるとは…。

そう思うと言葉が続かない。我が身の不甲斐なさを感じ入りながらナギスは苦笑する。

「頼りにしています。ナギス殿」

柔らかく微笑む表情に全幅の信頼と次代の王の威厳を垣間見たナギスは、改めてサイファ前へとひざまずいた。

「ご期待に添えるよう、尽力いたします」

普段では決して見ることでない峻厳たる面持ちで跪くナギスにサイファはうなずく。

「相手はあの 北の氷壁、我々兄弟が力を合わせなければ勝てると思えません」

「はっ…」

しかし…。

返事はしたものの、ナギスはサイファの言葉に戸惑いを覚える。ナギスはサイファとは違い、公的な立場としてはあくまでもガルデア青槍騎士団の師団長にしか過ぎない。確かにサイファとは兄弟同然のように育てられてきてはいるが、直接的な血のつながりがあるわけではない。ナギスは王位継承権第5位。現王、シュルツ・テルト・ラムシュタインの王弟の子。しかも正子ではなく庶子であるがゆえにその立場も微妙なものだ。

王族とは、王となる権利を有する者の集まりであり、例えば家族であろうとその利権を巡って骨肉の争いを繰り広げることも多いことは歴史が証明している。血が直系ではないことに不満を抱き、家系に拘泥する王族が謀反を起し、王へと成り代わることも決して少なくはない。

そういう立場の者に対して信頼を寄せているサイファの懐の深さには王たる資格が備わっていると思える。例えばその信頼が 異能 と呼ばれる自分の瞳の中に宿る力に向けられているものだとしても、そう易々と王位継承権を有する者を近づける気にはなれないと思うのだ。しかし、サイファはナギスが王位を奪取しようとしないうちに対しても確信に近いものを感じているようだ。ナギスにとってはそこが王たる証。自分が持つ異能の力よりもずっと驚異的な能力だと思えるのだが。

「そろそろ、敵がお出ましのようですね」

サイファの声に顔をあげると、謁見の間の扉を重々しく開く音が響いた。輝くばかりの採光をとっている謁見の間から見る扉の向こうは薄暗く見える。その暗がりの中に銀の鎧を身に纏った四十絡みの威丈夫が見えた。ゴルディア・ラキサリス ラダロス銀剣騎士団総長。その左後ろに二歩ほど下がってその男はいた。

灰色の総髪角張った顎にすっと伸びた鼻梁。黒い外套にがっしりとした身体を包んでいる。何よりも特徴的なのはその瞳。いかなる感情も一切を廃したかのように無表情を装った灰色の瞳はサイファを見るわけでもなく、ナギスを見るわけでもなく、ただ頑なに、何かを貫くかのようにまっすぐ虚空を見つめていた。